

第56回・第5期第6回宝塚市協働のまちづくり促進委員会 議事録

開催日時	令和5年（2023年）7月5日（水）18：30～19：40
開催場所	中央公民館 ホール
次 第	1 開会 2 議事 (1) 「宝塚市協働のまちづくり推進会議」の設置にかかる検討状況 (2) 5/31（水）開催（第3回第5期第3回）協働のマニュアル検討部会の検討状況 (3) 「(仮)10年間のまとめ」の作成 ア 内容（骨子）及び今後のスケジュール イ 推進会議への申し送り・期待すること 3 その他 4 閉会
出席委員	久会長、加藤委員、檜垣委員、井山委員、津國委員、中山委員、川上委員、喜多河委員、足立委員、前菌委員、沖野委員、上西委員、藤本委員、平原委員、番庄委員、岡本委員
開催形態	公開（傍聴人0名）

1 開会

事務局から、本日の出席者は16名であり、宝塚市協働のまちづくり促進委員会規則（以下「規則」という）第5条第2項に規定する過半数の出席要件を満たしているため、会議が成立していること、及び傍聴希望者はないことを報告した。

2 議事

(1) 「宝塚市協働のまちづくり推進会議」の設置にかかる検討状況

事務局より配布資料1に基づき説明を行った。

(2) 5/31（水）開催（第3回第5期第3回）協働のマニュアル検討部会の検討状況

事務局より配布資料2及び3に基づき説明を行った。

ア（会長）さらなる具体的な検討は次期の委員に引き継ぐことになる。マニュアル検討部会に参加できなかった方を中心に何か意見はあるか。

イ 意見無し

(3) 「(仮)10年間のまとめ」の作成

事務局より、今後のスケジュールを説明した後、次期への引継ぎ事項について事務局案を示し、意見交換を行った。内容は以下の通り。

ア 引継ぎ事項（案）1について、担い手づくりに関してはずっと頭を悩ませている。もう少し増えてくれると嬉しいのはその通りだが、活動できる母数が減っているという事実も一方にはある。若い現役世代だけでなく、リタイアした世代も年金

を受け取れるまで再雇用や再就職などで仕事をしている。30年前にリタイアした人に比べ、今の人は引き続き仕事をしている人が多いため、地域活動に関わる人数が大きく異なるという事情がある。「担い手がいないとずっと言っているじゃないか」というご意見をお持ちの方もいると思うが、そもそも母数が減っていることを私たちは理解して、その上で一緒に活動してくれる人が増えてくれると嬉しいというところで活動する必要があると思っている。10年経つと世の中の状況がガラリと変わるので、自分が活動を始めた頃はこうだったのに、なぜ今はこんなのだろうと思うこともあるが、そういったことを理解しながら活動していけたら良いと思う。数の多さだけでなく、少ない人数でも工夫次第で効果的に活動できる方法も探しながら活動していけると良い。

イ (会長) タイトルが「担い手づくり」になってしまうと、担い手を増やさないといいけないというニュアンスになるので、「担い手の問題」をどう考えるかとする、減っていく中でどのように効果的に活動が回せるかという議論にもつながる。タイトルのつけ方も工夫の必要があった。

ウ ここ何年かの間に随分担い手が減ったと感じている。この会議の中でも何度も出ているが、これまでとは違う新しい形で地域活動や地域課題に取り組む人が増えていて、そういった人たちを取り込めると良いと思う。そういう先進事例も、知らないとどうして良いかわからない。今活動している人が、先進事例を知って「そういった形もあるのか」とトライしてみることで、新しい形の担い手を引き込むことが出来るようになることを期待している。ぜひ、色々な先進事例を紹介して、実際に活動している人がそのような取り組みが出来るような働きかけを考えてもらいたい。

それから引継ぎ事項(案)2について、契約のガイドラインを作成した時に、作成したことで協働の事業がどの程度増えたか(数の推移)や形態がどうなっていたかなどが見える化していかないといけないという意見や、実際に宝塚市の協働の状況がわからないという意見も出ていたので、それを事例の収集・検証と併せて見える化するなど、次の推進会議の中でどのように関わっていくのかも含めて検討して欲しい。

エ (会長) 契約のガイドラインがうまくいっているかどうかを引継ぎ事項(案)2で検証して欲しいということだったが、私は別出しでも良いと思う。我々が力を入れて、2年間の大きな成果の1つとしてこのガイドラインを作成したが、次の会議の方々にはそれを追いかけて評価をお願いしたいと思う。そのため引継ぎ事項の1つとして項目出ししても良いと考える。

オ (会長) 今までの組織は確かに担い手不足・後継者不足の問題があるが、新たな活動も生まれている。若い世代の新しい動きも生まれているはずなので、トータルをみると必ずしも担い手が不足しているわけではないと思う。この新しい方々が、どのように今までの組織と連携していくのかということのも考えたら良いのではないかな。よく相談があるのが、後継者不足の話。例えば、「30年前にみんなで頑張っ

団体を作り活動してきたが、なかなか新しい人が入ってこず当初のメンバーが 30 歳年を取っただけ。どうしたら後継者に活動をお渡しできるか。」という相談を受ける。私は、凄く乱暴な答えをする時があって、「後継者って誰にとって重要な人か」と話をする。これはどういうことかという、今の活動を受け継いで欲しいと思っているのは今のメンバーであって、次の世代の人はその活動を受け継ぎたくないと思っているから後継者が現れない。ひょっとすると、同じ地域課題解決のための活動で、違う動き方をしている団体が生まれている可能性があって、その組織を引き継ぐのではなくそういう新しい団体にお任せをすることでのバトンタッチもあるのではないか。後継者という言葉が出てきた瞬間に、何か自分たちの活動をそのままの形で受け継いで欲しいという話に見えてしまう。そこは、その頭を転換することによって別のバトンタッチの仕方がないかということがある。必ずしも後継者と言わなくても、同じ課題解決の活動を違う形で違う団体が担っていけると良いよねという考え方をうまく伝えて行って欲しい。具体例を出すと、豊中市の市民活動センターをずっと指定管理で運営してきた団体が、今違う団体にバトンタッチしている。それは、初代の方々が「もう私たちはきっぱり身を引く。私たちの世代ではなく、次の世代の方々にこの市民活動センターの担い手になって欲しい。ついては、私たちはこのまま身を引くので、次の団体が自分たちの想いでまた運営をしてくれたら良い。」と非常に潔いバトンタッチの仕方をされた。続いて、コミュニティビジネスの育成・支援の推進（引継ぎ事項（案）4）について、今、協同労働の考え方が出てきていて、労働者協同組合も出てきている。新しい担い手の法人格として労働者協同組合ができた。労働者協同組合の法人格を使いながら、協同労働という形でお金もしっかりといただきながら地域の課題を解決するタイプの団体が今後増えてくる可能性がある。そこを協働の担い手の 1 つのタイプとしてどう考えるのかということも、法律もできたので次期の委員には考えて欲しい。

カ 確かに、今の組織の中で活動を引き継いでいく後継者という捉え方で行くとなかなかおらず、皆さん組織に参加するのは嫌だとなるが、「私、こんなことあったらお手伝いしますよ」という人はいる。先日こんな話があった。夏まつりの開催の一部を担っている PTA の人から負担を軽減するために、外部のイベント業者に委託をするという話が出てきた。触れ合いながら地域の中で祭りを作っていくことが本来のあるべき姿だと私は思っているため、単にお店を増やすという観点で外部業者を入れることは本末転倒ではないかと感じた。先ほどの話に戻ると、色々な団体がある中で地域活動や市民活動に求めるところ（何が目標か）が大きくずれなければ、色々な団体が参加しながらそこを誰かがコーディネートし、活動については全部お任せしますよという方法もありかなと思うが、色々な団体が参加するが実際はバラバラになってしまったら、何のための地域活動、市民活動かなと、活動の目標、趣旨が段々と見えなくなる可能性があるのではと心配している。

キ （会長）次期の委員に議論してもらえればと思うが、私は大きく 2 つの選択肢が

あると思う。1つ目は、担い手が少なくなって今の活動の規模が難しいのであれば規模を縮小する。2つ目は、今の活動の規模を継続したいのであれば、今のまち協の役員だけで取り組むのではなく、夏祭りにお店を出したい人を募集していく。委員の言う通り、単に規模を保つためにお金を払って外部業者を呼ぶのは何のためにやっているのかと私も疑問に思う。今の担い手の体力と祭りの規模で言えば、規模を縮小するか、出たいという別の方々を募集するかだと思う。

ク 色々なやり方があると思うが、活動する中において、常に何のためにするのかを見失ってはいけない。地域や市民の中で常に確認しながら、目的をもって活動をしていかなければならない。そうすれば、「私も参加します」という方が出てくるかもしれない。地域活動の活性化という目標に向かってつながりながら活動していくということに関しては、地域も新しいやり方を考えていかなければならない。

ケ (会長) 八尾市の山本小学校区まちづくり協議会がまちづくり計画を作成するときに、改めて「夏祭りは何のためにしていたのか」という意見交換をした。そうすると、みんなの意見が異なった。意見を1つにまとめる必要はないが、改めて何のためにしているのかを聞くということが重要で、いくつか異なる目的のために活動をしていることが見えてきた、ということを実らかにできたことが良かった。今までなぜ議論をしなくても夏祭りが開催出来ていたかということ、去年していたから今年もやろうというノリで誰も疑問もなく出来ていた。一定、考え方の仕切りが出来たのかなと会長は言っていた。

堺市の南区にある新檜尾台校区連合自治会は、ここ数十年、全ての行事を実行委員会形式で行っている。全て行いたい人に手を挙げてもらって実行委員会で活動している。いわゆる役員は全体をマネジメントしていく役割に徹している。実行委員会は毎年募集なので、難しい年は入らなければ良いので、自分のペースで活動が出来る。そういう事例も紹介できる仕組みがあれば良いと思う。

コ 引継ぎ事項(案)3に関連して、何年か前に促進委員会の中でA5判サイズの小さい成果物(冊子)を作った。完成品をみんなで見ている時に、作業委員の1人が「あなたが挿絵を描いたら良かったのに」と言った。私が絵を描く職業だということをご方は知っていて、外部の人に頼むのではなく、同じ委員の中に私がいるのだから、そしたら発表の場もできるのにといい考えだった。私は、そういうことを言われるのに慣れているので「(プロなので)私が描いたら高いよ」と伝えたが、その委員の方が「いいやんか」と言ったので「私がもし、料理人だったとして、会議が長引くからみんなにタダでご飯を作ってと言うの」と聞くと、さもうるさそうにされて会話はそれで終わった。その時にその場にいた事務局の方が、後で連絡をくれて「あの時、ああいう発言を止められなかった。絵を趣味で描いている人ではなく、職業として描いている人に対してあの発言は失礼だった。しかもそれは、ジェンダーの要素もからんでいたと思う。自分は市の職員として、色々な研修でそういうことを沢山学んできたのに、あの場でその委員さんの発言を修正することを咄嗟に出来なかった。本当に申し訳ございませんでした。今後はこのよ

うなことがないように気を付けます。」と言ってくれた。私はとても感動して、今まで色々なところに参加してきたが、職員がそんな風に言ってくれたのは初めての経験だった。私が市の職員に求めるのは、そういう部分で、こういう場にいると市職員対市民の構図になりがちだが、必ずしもそうではなくて、市民同士が見下したり誤解したまま話をしたりすることがある。そういう時に、市職員が「いや、そうじゃないですよ、こうですよ。それはあまり良くないですね。」と軌道修正してくれるための存在という役割がとても大事だと思っている。この引継ぎ事項(案)3の研修に関して、協働のまちづくり促進委員会の中での職員研修だろうと思うが、他の研修や、市民についても他の母体となっている色々なところで学んだことをお互い持ち寄って話し合っていたら良いなと思っている。それを、引継ぎ事項(案)3のところにもどのように組み込むかは、アイデアは出てこないが、この中だけの研修ではなく、色々なところで学んだことをみんなで持ち寄ってもらえたら良いと思う。私の話は、何年か前の話だが、いつか機会があれば紹介したいなと思い、この場で申し上げた。

サ (会長) 文章はまた事務局で考えて欲しい。違う見方をすれば、研修を色々していても、それが実践の場面で生かされているのかどうかという視点も欲しいということ。ちなみに、よく市役所でも、情報セキュリティの研修をする。うちも個人情報情報を沢山握っているから、情報セキュリティの研修をするが、情報を盗むウイルスが仕込まれているから、こういうメールは開かないでくださいという研修をして1週間後くらいに抜き打ちで情報センターから一斉メールが送られてくる。担当職員に聞くと、実は何人かの職員が開けてしまっている。あれだけ1週間前に、こういうメールは開かないでねと教えていても、何人かは開いてしまう。協働の研修を受けて、頭の中ではわかっているが実際の現場でそれが的確に使えているかどうかを検証することも重要である。

引継ぎ事項(案)4の話にも重なるが、今までは市民は無償ボランティアで当たり前でしょうという感覚が様々にあった。そうではなく、プロに頼んだらそれなりのお金を差上げるのは当然の話。「それはビジネスとしているのだから、協働とは違います」という話にはなりませんよねという話。お金を取りながらビジネスとしての、社会貢献活動や地域のための活動を行う人たちがこれから益々増えてくると思うので、そういう方々とどう接するのかという問題もある。

シ 協働の契約のガイドラインを作るときに、市の委託が本当に委託なのかどうか見直しをしようという話が出ていた。今一度、各部の中で委託という名前で作られているものが本当に委託なのか検証が必要。協働の委託に関するガイドラインを作成したことによって、もう一度、市の方で検証することで契約のガイドラインが生きてくるのではないかと。それを次期の検討項目に入れてはどうか。

ス (会長) ぜひとも追加でお願いしたいと思う。いわゆるグレーゾーンが増えてきているので、そこをどう考えるかだと思ふ。

様々な意見が出たので、配布資料4のスケジュール(案)にあるように、次回に事

務局でとりまとめた素案を見て意見交換をして、修正や追加があれば言ってもらえればと思う。

1つ思い出したが、今日ここに来る前は大阪府立布施高校の学校運営協議会で議論してきたが、PTAの会長がPTAの全国大会の話をしていて、PTAがどんどんなくなっている状況を紹介してくれた。今まであった組織が本当に必要かどうかという議論が始まっているということ。引継ぎ事項(案)1の担い手づくりの話の中で、今までの組織論、組織が本当に必要かどうか見直しが必要になってきている。PTAの連合会から、いくつかの小学校が脱退をするということが神戸市で起こった。これも非常に重要な問題で、全ての組織に上部団体がいる。PTAや老人会にも連合会がある。この連合会がどうあるべきか。自分たちの地域で団体の活動はしたいが、連合会に協力することが重荷になって、「そこまではするのだったら私は出来ない。」となり、担い手が減っているという事実もある。単独の組織を見ているのではなく、連合会の存在をどう考えるのかも1つの議論になるのではないかな。さらに言えば、上部団体だけでなく地域の充て職に使われてしまっているところがある。大阪府平野区で、2月に若手の方々のワークショップに参加した。ちょうど2月頃で、次の役員は見つかっているかという議論になった。見つかっていないところの大半は、PTAの役員になると他の充て職がついてまわってくる。PTAの活動は出来るが、地域のこの団体へ協力してくれやこの団体の会合に顔を出せと言われると、「いや、そこまでは・・・」となって、PTAの役員の成り手がなくなる。本当にそれぞれの組織が純粋にそこの活動だけを出来ているかという問題も非常に大きいのではないかなと思う。さらに、一度PTAの役員になると、一生地域の役が付いて回るといえるのが見えているから、役員にならないという方も出てくると思う。顔が知れてしまうとずっと引っ張られてしまうという怖さみたいなものが特に若い方々の担い手へ足を踏み入れさせない要因となっている。逆に言うと、自分のペースで出来る活動がもっと増えていけば、担い手は自ずと出てくるのではと期待している。10の力で20人がするよりも、2の力で100人が集まれば、同じ200の力になる。1人の力は1/5になる。そういう考え方が出来れば、担い手が増えることによって1人1人の負担を軽減できる。1人あたりの負担が軽減されれば、それぐらいだったら出来るという人が増えてきて、好循環が生まれる。そういう好事例もあるはずだから、うまくいっている事例を集めながら、なぜうまくいっているか秘訣を抜き出して情報共有が出来る仕組みが出来たら良いと期待している。

3 その他

- (1) 委員より、子育てが一段落して何かしようという方を対象に、7/16(日)に龍谷大学の川中大輔准教授を招き講演会を行う旨の案内があった。情報は、ポータルサイトに掲載予定。
- (2) 委員より、夏祭りの開催について案内があった。地域交流の一環として、中学校の

放送部の生徒が場内アナウンスをする。

- (3) 委員より、まち協主催のビアガーデンについて案内があった。
- (4) 社会福祉協議会より、子育て支援のInstagramについて案内があった。若い世代でテーマ型の活動団体が増えている。子育て支援活動であれば、各地区担当に言えばInstagramで掲載可能。そんな中で、ある団体から、団体ではなく個人アカウントをタグ付けして欲しいと依頼があった。個人アカウントをタグ付けすると、その方の商売のお知らせに繋がっていくため、悩んだが、地域活動をすることでビジネスチャンスにつながるのであれば良いのではとなり、個人アカウントのタグ付けも認めた。若い方々は、無償では地域に残らないのではという危惧もあり、私たちの意識も変えていかないといけないと思った。
- (5) 会長より、大阪府鶴見区のまちづくり協議会で、若い世代にイベントに来てもらう工夫として、地域内の事業者(ネイルサロン)に来てもらった事例の紹介があった。

4 閉会

以 上